古今東西

タウン誌カフェ

第八回

全国には津々浦々、魅力のある町には、魅力あふれるタウン誌があります。情報の電子化の波に押されて、目立たなくなっている面はありますが、まだまだタウン誌には紙媒体のもつ存在感、やさしい手触り、独特の風合いが残されています。このコーナーでは、そんな全国のタウン誌を紹介します。

海を巡るタウン誌

七月二十一日「海の日」はだいぶ過ぎてしまいましたが、今回は海にかかわるタウン誌を集めてみました。

まずは、日本の誇る内海・瀬戸内海から『**せとうち暮らし**』（ROOTS BOOKS・発行、年3回）を。

二〇一四年春号（通巻十二号、本体八九〇円）はリニューアル第一号も兼ねており一気に増頁。発行所は香川県高松市所在のようですが、表紙には「瀬戸内海へようこそ」と刷られ、とにかく島についてのあれこれがとりあげられています。各島が連載で取材され今号は周防大島です。風景や人々の生活、グルメ、同島出身の民俗学者・宮本常一が紹介されています。賃貸物件紹介の頁もあります（「妄想移住計画」）。謳い文句は「瀬戸内に暮らす幸せ、見つけにいこう」ですが、本文からは島の生活と歴史の豊かさを見出していく心意気を感じます。本文はオールカラーですが、風景写真よりも人々の生活や暮らしを写したものが多いようです。巻末には「せとうち島MAP」があります。まち歩きならぬ「しま歩き」ができます。

印象に残ったのは世界の内海と比較する頁です。地中海やバルト海と比べると瀬戸内海が非常に小さい！のです。小さくともいろんなものが詰まっている、それが内海の面白さでしょうか。ちなみに前号の特集は瀬戸内国際芸術祭ですが、これもいろいろ詰まった芸術祭です。

さて、海や島のグルメといえば魚料理。その魚専門のタウン誌が『**Fのさかな**』（能登カルチャークラブ・発行、季刊）です。「F」とはFISHと能登半島の形をかけたものだとか。「日本のさかな文化を能登から発信するフリーマガジン」「もっと魚を知ろう」を謳い、発行所は石川県七尾市所在。二九号（二〇一四年春発行）の特集は「黒鯛」。今までの特集も「アマダイ」「サワラ」「岩ガキ」「コチ」と手加減なしの直球勝負です。

特集の内容はクロダイの生態や文化にもふれているものの、記事のメインは料理関係。食事やお取り寄せを含めた広告も満載です。見事に本文と広告とが融合しています。「おいしいもの」は世界共通のはずですから、本誌の世界発信も夢ではない気がします。

この二誌を遡ること二十年前に世界を目指しているのが『**FS FUKUOKA STYLE**』（福博総合印刷株式会社・発行）です。私の手元にある第一号（一九九一年一月発行）の特集は「水辺都市」。福岡をはじめ、ロンドン、蘇州、ヴェネツィア、柳川といった世界じゅうの水辺都市を取り上げた論考を、豊富なカラー写真とともに掲載しています。

神楽坂とも縁の深い西村幸夫先生や法政大学の陣内教授の名前も見えます。福岡から海をはさんで「世界」を目指した気合いは、英語併記という本文・キャプションにも表れています。2001年頃（30号）まで刊行され、今はなき地方書専門書店アクセスでも注目の雑誌として紹介されていました（『神保町「書肆アクセス」半畳日記』無明舎）。

右から『せとうち暮らし』『Fのさかな』『FUKUOKA STYLE』

これらのタウン誌からは、人々を「つなぐ」という海の側面を見ることができます。

（文 高橋正樹）